

アメリカ女性医療宣教師の中国と日本伝道

——メアリ・アナ・ホルブルックの場合（一八八一年～一九〇七年）

石井紀子

はじめに

周知の通りアメリカ女性宣教師によるプロテスタント海外伝道は一九世紀後半に隆盛をみて世紀転換期から第一次世界大戦にかけてその最盛期を迎えた。第二次宗教覚醒運動により海外伝道熱が高まる中、南北戦争での看護活動等の経験を経てアメリカ女性たちは、女性だけで組織化して「家庭性」を拡大し、社会改革運動をおし進めていくことができるという自信を得た。その結果、超教派ないし教派ごとに多数の女性による宣教師派遣母体が設立されたと言われる。アメリカ本国の女性から資金を収集して独身女性宣教師を海外に派遣する目的で設立されたこの女性伝道局の成立によって最盛期には男性宣教師を凌駕する人数の女性宣教師がアフリカ、トルコからアジア諸国まで派遣された^①。

伝道地では人々がキリスト教に警戒心を持つ場合が多かったので、教育事業、医療事業、福祉事業を端緒とする伝道が主流となったことはつとに知られる。特に女性宣教師は、宣教師補 (assistant missionary) という立場で按手礼を持たず、牧会や聖書翻訳は一般的に男性宣教師の仕事と明確に性別役割分業の線が引かれており、その活動領域が限定されていた。したがって、女性宣教師はとりわけこの三事業を中心として伝道地の女性や子供、家庭に接触していた。

日本と中国での女性宣教師の活動を比較すると、日本では三事業のうち女子教育が中心であったのに対し、中国では女子教育のみならず、医療も成果をあげた。宣教師のネットワークの下、最初の女医が育てられ、やがて女子医科大学も設立された。そもそも医療は男女を問わず、中国伝道において有望な分野だったのである^②。実際

アメリカン・ボードから派遣された医療宣教師総数九三名のうち最多の三三名が中国に派遣され、以下トルコ三名、アフリカ一五名、サンドイッチ島（現在のハワイ）一〇名、日本七名、チェロキー三名、ダコタ一名と続く。女性医療宣教師の人数に絞ると、中国には最多でしかも男性医療宣教師一〇名を上回る二三名が派遣されているのに対し、日本に來た医師の資格を持つ女性宣教師はわずか三名であった。しかもそのうち二名のサラ・バックリーとハリエット・ギューリック・クラークは宣教師の妻として派遣され、後述のホルブルックを含めていずれも女性医療宣教師という専門職で派遣されていたわけではない。この中で唯一の独身宣教師がメアリ・アナ・ホルブルックだった。^③ホルブルックは中国で六年、日本で計一八年の伝道経験を持つ。中国では医師として伝道を行い、日本では医療ではなく、教育事業に専念し、神戸英和女学校（一八七五年創立。一八九四年神戸女学院と改称）のカレッジ昇格実現に貢献し、理科教育の分野において日本で最初に女子高等教育の先鞭をつけた一人であった。

同じアメリカン・ボードの同一の女性宣教師が伝道地によって異なる事業を展開したという事実は、伝道地の必要に応じて宣教師が異なる対応を迫られたことを示す好事例と言えよう。なぜ中国では女性による医療伝道が受け入れられ、日本では受け入れられず、女子教育が中心となったか、アメリカ側の資料に加えて伝道地、すな

わち中国や日本の資料にあたらない限り、その差異の理由の詳細な分析にまで踏み込むことはできない。本稿ではその第一歩として宣教師書簡にみられるホルブルックの伝道活動に検討を加える。ホルブルックは中国と日本をどのように見ていたのか、そして伝道地の状況に応じてどのように伝道活動を展開して結果として異なる事業を行ったのか、アメリカ側の資料に依拠した考察を試みる。一人の宣教師の目を通してアジアの二つの異なる伝道地を比較することによって、近年盛んになってきた伝道地側の主体性に光をあてる研究の一助となるような手がかりを提示したい。他方、宣教師は伝道地のニーズに敏感であるばかりでなく、与えられた条件の中で自分を一番有益に活用することにも敏感であったはずである。アメリカ本国での女子高等教育の普及に伴って、一八八〇年代以降専門知識ないし技能を備えた上で伝道活動にあたる女性宣教師が増えていったが、自分の専門と伝道の関係を宣教師自身がどのように捉えていたかも考察したい。本稿では主として宣教師書簡を手がかりに、アメリカン・ボードの医療宣教師として一八八一年から一八八七年まで北中国ミッションに派遣され、一八八九年から一八九六年、一九〇二年から一九〇五年、一九〇七年から一九一〇年まで日本で主として神戸女学院の発展に貢献したメアリ・アナ・ホルブルックの伝道活動を検討する。

一 ホルブルックの略歴

メアリ・アナ・ホルブルックは一八五四年七月十日リチャード・ホルブルックとルース・R・フォードの長女としてマサチューセッツ州ロックランドに生まれた。父リチャードは小さな農場を営み、細々と酪農事業も行っていた。母ルースの祖先はメイフラワー号入植者にまで溯れる。兄アルバート、弟チャールズとともに熱心なクリスチャンの家庭に育ち、一家はロックランド第一会衆派教会から八分の三マイルほど離れたユニオン街に居を構えていた。家庭内で海外伝道への関心も高く、メアリのみならず弟チャールズもアマースト・カレッジ卒業後アメリカン・ボードの宣教師として南アフリカ・ミッシュンに派遣され、一八八三年から九年間、海外伝道に従事した。声帯を痛めたチャールズは説教ができなくなることを懸念して帰米後改めて医学の勉強をはじめ、医師の免許もとった。一家から二人も宣教師が出たので、兄に加えて、母は縫い物の内職をして精神面、資金面での支援を続けたという。

メアリはロックランドの地元の学校を出た後、二年ずつハノーヴァーとワイマスで教師の仕事をしながらマウント・ホリヨークに進学し、マウント・ホリヨークが一八八八年に学位授与権を得る一〇年前の一八七八年に修了した。ホルブルックが故郷ロックランドの教会で受洗したのは一五歳のときだったが、海外伝道に赴くべしと

いう回心を体験したのはマウント・ホリヨーク在学中のことだったという。マウント・ホリヨークは女教師フィデリオ・フィスクを女性宣教師のパイオニアとして派遣して以来、フィスクが母校に送る書簡を素材に、創立者メアリ・ライオン自ら校内に海外伝道熱を喚起し、数多くの宣教師を輩出した女性宣教師登竜門として名高い⁽⁴⁾。ところがマウント・ホリヨークに残る記録によれば、当初ホルブルックは海外伝道に全く関心が無かったという。

ある日ホルブルックは自分には異常に退屈に感じられる宣教師書簡を耳にして自分が宣教師だったらどのような手紙を書くだろうという思いに駆られた。その後この考えに取り付かれることになる。ホルブルック自身は自分に宣教師になる適性は全くないと確信していたのでこの出来事は不可解だった。その思いを断ち切るために、断固宣教師にはならないという決断をし、聖書を片付けて参加を義務付けられている宗教儀式以外には一切出席しなかった。それでもなおその声は止むことがなく、ついにホルブルックは断食の日にその日一日は全ての会合に出席するとルームメートに告げた。その日一日の祈りによってホルブルックの頑なな意志は解きほぐされていった。自室でホルブルックは「道筋さえ明示されるなら神のご意思どおりどこにでも赴く」と天の神に告白した。その時点でも宣教師になる意志は微塵もなかったがこの告白により心に平安が訪れ、それまで知らなかった愛とあらゆる伝道地での伝道への関心で心が満

ち溢れたという。神の仕事への自分の有用性を高めるために、ホルブルックはさらに医学を勉強したいという志を持つ。その切実な願いを知った友人たちの資金援助によりホルブルックはマウント・ホリヤーク修了後ミシガン大学アン・アーバー校の医学部に進学し一八八〇年M.D.を取得した。六ヶ月間のニューヨークランド婦人小児病院での研修後、アメリカン・ボードの医療宣教師としてボストンのウーマンズ・ボード支援の下、一八八一年北中国ミッシヨンの通州（現・通県）に赴任した。⁵⁾

二 北中国ミッシヨンでのホルブルックの医療伝道

六年間に及ぶホルブルックの北中国ミッシヨンでの伝道はホルブルックの念願通り、女性を対象とした医療活動だった。通州に女性のための診療所を開設し、女性のための医療活動の土台を築いた。またその地方で最古の病院のひとつであったアメリカン・ボードの病院でも医療に従事した。医療に加え、診療所の奥では一八八四年「医療バイブル・ウーマン養成の医学コース」を始めた。一八八五年三月の書簡では戦争が始まって新患が減少し、医学コースに十分時間を割くことができるようになり、中国語では医学書がないので、自分が講義を英語で書き、これを他の教師が中国語に翻訳した本を学生に配っていると伝える。⁶⁾ またミッシヨンの学校では生物学を講義し、中国語で化学や生物学の基礎的な教科書も数冊執筆した。ホ

ルブルックの書いた教科書は中国の北部、南部の数多くの学校やカレッジで多用され、中国のミッシヨン・スクールにこれほど適した教科書は他になかったので一九〇三年に改訂版が再版されたと前述のマウント・ホリヤークの記録は伝える。⁷⁾ ホルブルックは本国ボード宛ての書簡の中で、中国の「異教ぶり (Heathenism)」と医療伝道の順調な進展を報告し、男性医師に体を診せることを拒む中国女性のために、医療活動を男女で分けることと女性医療宣教師の必要性について訴えた。

ホルブルックは一八八一年一月、通州着任後すぐに医療活動にあたった。着任当初のホルブルックのボード宛ての書簡には医療を行っていることによって、自分が役に立っている充実感と中国の「異教ぶり」に消沈し、嫌悪感すら抱いているさまがみられる。ホルブルックはまず診療所で女性を対象とした医療活動に着手した。手始めに週二回午後診療を行い、残りの時間はできるだけ中国語の習得にあてた。「一回の処方箋につき現金で一〇（単位は不明）請求されることによって患者の数は制限されている」が「新しい診療所の建物が整備されるときには中国人も診療費の徴収に慣れるであろうし、良い方向に進んでいる」と伝える。⁸⁾ 治療費の徴収があっても、十分な患者の出入りがあったことが見て取れる。それほど、中国において女性に対する医療の分野は西洋人が中国女性に容易に接近できる場であった。アメリカン・ボードの機関紙ミッシヨナリー・ヘ

ラルドによれば、当時の中国女性のおかれていた医療環境は「真に悲惨であわれなもの」であり、アメリカ人宣教師の目に「中国女性の病気は奇妙な考えや迷信に取り付かれた無知な老女により、もっとも野蛮な方法で治療が行われている」と映った。例として痙攣を起こした三歳児の喉に熱して赤くなった針を突き刺した事例を引く。これは鍼治療を理解しなかったアメリカ人の反応とも推察できるが、日本の場合とは対照的に中国女性は医療を求めてアメリカ女性の開く診療所に集まった。ミッシヨナリー・ヘラルドは「中国での医療事業は努力しなくても自然に拡大するきわめて有望な分野」と注目し、わずか九ヶ月以内に五〇〇〇人の患者が訪れたことを伝える。

中国全土の各地方から患者が集まり、中には一〇〇マイル以上離れた遠隔地から来るものもあった。そうした診療所で待合室は週のうち六日間教会と化し、治癒した喜びと感謝の思いで患者はごく自然に宣教師の語るキリストの言葉に耳を傾けた。⁽⁹⁾

果たして、本当に中国人は「まともな医療も知らない不幸な境遇」にあつたためにアメリカ人宣教師の開く診療所に集まったのだろうか。中国は豊かな漢方医学の伝統と歴史を持つ国なので、後述の二人のバイオニア中国人女医チェンとメイユの研究を行ったシーモの指摘通り、こうした見解は西洋人が現地中国人の不健康、不衛生なさまに自分たち白人キリスト教文化の優位を重ね合わせた植民地主義的(コロンIAL)な見方にすぎないのではないかという疑問

が湧く。⁽¹¹⁾ ホルブルックの赴任した通州の気候や社会経済状況、そして診療所に集まった中国人の社会階層を特定できない現時点では推測の域を出ないが、ハンターが *The Gospel of Gentility* (1984) の中で指摘したようにアメリカン・ボードの北中国ミッシヨンにおいて富裕層、知識階級の中国人は宣教師に警戒心を抱いてこれを避け、そもそも医療を受ける経済力を持たない低所得者層が多数、医療そのものを求めて宣教師の診療所を訪れた可能性が高い。

そもそも中国ではハンターが指摘するようにキリスト教に対する反感が根強かったので、独身女性宣教師が伝道活動を開始した初期から宣教師が開設する女子教育機関に上層、知識階級の女性は寄り付かず、対象となったのは貧困層にある社会のマージナルな存在の女性だった。開港地か内陸部かという地域差によって宣教師に対する寛容度の変化には一〇年から数十年におよぶ時間差があったが、ミッシヨン・スクールがエリート層の女性をつくる登竜門として上昇志向の強い少女をひきつけるようになったのは概ね二〇世紀に入ってからのことである。貧困層を対象としたものの、なかなか女学校に生徒が集まらないので、特に初期の一八七〇年代、一八八〇年代は生徒確保のため「孤児や捨て子を金銭で宣教師が買い取って、養女としてひきとらざるをえなかった」⁽¹²⁾。ダナ・ロバートによれば、一八七二年に中国で女性のための仕事を開始したメソジスト派宣教師ゲートルード・ハウは女性の纏足が普及していた中部地方で全寮

制の女学校を開いたが、女子教育への反対が強すぎて一八八三年になってもわずか一〇名しか生徒が集まらなかったという。しかしこの学校はのちに中国の女学校 (Ruison School) としてトップの大学進学率を誇るようになる。女学校に生徒が集まらなかったのも、ハウは結局四名の中国人少女を養女としてひきとり、母親代わりとなって、同じ屋根の下で教育した。ある中国人牧師は自分の七歳の娘を医師にしてくれるようハウに託した。ハウは一八八〇年から一八八一年にかけてこうした少女たちに英語と西洋科学を教え始め、数学、化学、物理学、ラテン語を自ら指導した生徒の内もとても優秀な女生徒五名をつれて一八九二年に渡米し、ミシガン大学を受験させた。そのうち二人の養女カン・チェン (Kang Cheng, 英語名 Ida Kahn) とシ・メイユ (Shih Mei-yu, 英語名 Mary Stone, 前述の七歳の少女) はミシガン大学医学部を優等で卒業し、西洋医学を学んだバイオニア女医として有名になる。¹³ 宣教師の養女としてアメリカでの高等教育を受けた最初の中国女性を選んだ専門が医学であったという事実は当時中国側が切望したものが女子教育より前に、貧民層の中国女性の生存に不可欠だった医療だったことを示唆する。

ホルブルックの書簡によればメソジスト派ミッションはホルブルックが中国に着任したとき、既に医療伝道活動を盛んに行っていたらしい。一八八二年八月ホルブルックはメソジスト派ミッションが中国人から借りていた山の中の寺院に避暑に招かれ、「メソジスト

派のミッションには医師が豊富なのでサニタリウムの必要はない」と本国に伝えた。またメソジスト派から中国の寺院は金儲けのためにその建物を貸すという情報を得て、アメリカン・ボードも宣教師の避暑と健康のために夏場だけ借りることを推奨する。¹⁴

このようにホルブルックが通州に滞在した一八八〇年代、女学校より女性対象の医療こそ、伝道の対象となった貧困層の中国女性の必要を満たすものであったと言えよう。しかも中国社会では男女のジェンダーの分離が厳格であったので男女が同席することは禁じられており、したがって診察のため中国女性が男性医師に体を診せることはなかった。つまり貧困層の中国女性の医療は半ば放置されていたといえる。中国側の厳格なジェンダーの分離のおかげでこの分野でアメリカ女性医療宣教師が活躍できる可能性は大きかった。ホルブルックの医療活動もホルブルックが通州の生活に慣れるに従って患者数がふえ順調に拡大した。着任当初から宣教師の娘であるキヤリー・シェフィールドや一人の有能なマリ人の助手兼看護婦が患者との間の通訳を務めたので語学のハンデで診療が滞ることはなかった。また診療所では診察を行う前にアンドリュースやエヴァンズといった他の女性宣教師が待合室であらかじめ三〇分ほど患者と話をし、また診察後も女性宣教師がキリスト教の話をした。ホルブルックは「中国女性たちは熱心に話を聞き、そのうちの数名は非常に興味を持って教会に出席している。診療所を開設してから医療伝道

の影響で受洗したのはまだ一名だが、他の方法ではキリストのことを決して耳にすることのない中国人と接する有効な手段となっており、良い仕事となる希望がある」と早くも着任四ヵ月後の一八八二年三月の書簡で、本国に明るい見通しを伝えた。現地は赴任前に抱いていた通り、《異教》で《野蛮》であったが、「気の毒な生き物（中国人の事…著者注）は苦しみから解放されると心から深謝してくれるのでその温かい心に触れると実は多くの陽のあたる部分があることがわかる」と医療活動自体の喜びを語った。しかし身体の医療にとどまらず、さらに「自分自身の経験として霊的医師としての物語を早く伝えたい」という。一八八三年六月の「医療伝道報告」では診療所の仕事が増し、毎日午後二時から四時まで診療所で診療し、その後往診していることを報告した。この時点では六名のクリスチャンの中国女性が待合室で二時間ほど患者にキリスト教の話をする形で伝道を行った。

医療は中国人の間で評判が高く、やがて男性患者も来るようになった。しかし男性患者が来ると、中国ではジェンダーが厳格に分離しているために女性診療所として享受している良い評判が落ちるとのちに述懐する。¹⁵ホルブルックは、内心強い抵抗を感じつつも、一八八三年頃は気の毒で男性患者を完全に拒むことはできず、結局診療時間と自分の中国語を勉強する時間外に夏は玄関先の階段や門、広場で、冬は自分の部屋で特別に診察した。しかしこのことで男性

医師の必要を痛感し、アメリカン・ボードの学校に通うある男子生徒が北京に滞在する長老派の医療宣教師B・C・アッターベリーの元で医学を勉強するようにとその費用をニューヨークに住むアッターベリーの母が提供してくれるようになった経緯を記し、この中国人少年が将来医師として診療所に着任することに期待を寄せた。さらに将来この需要に応えるために男性用の診療所の建設も必要と考えて隣接地の購入のための資金支援を本国の運営委員会（Prudential Committee）に要請した。¹⁶ボストンにあるウーマンズ・ボードとアメリカン・ボードの運営委員会の支持を取り付けたホルブルックは隣接地を購入し、さらにもう一つ近くで売りに出ている土地の購入希望も出す。本国の若いアメリカ女性たちの募金によって男性用診療所の建設費を確保したホルブルックはその後男性用診療所が完成するまでの間、女性診療所の良い評判を守るために、男性患者は断って北京に送っていたと前述の一八八五年三月の書簡に記す。

一方一八八四年七月、「この建物の中の一部屋を教室にして医学を勉強するクラスを作るのが自分の夢でその計画が実施される」と記す。「四人の若い女性がその医療バイブル・ウーマン・トレーニング・スクール（the Training School for Medicine Bible Women）の第一期生となり、ミス・アンドリュースは聖書学部を担当し、そこには医療コースを取らない多くの学生が所属する」という。結局ホルブルックは同年、中国女性が「自分の家庭と近隣の地域コミュニ

ティの医療」ができるように二年制の医療コースを設立した。またのち通州カレッジとなった学校で化学と生物学を教えた。「通州診療所の第二回年次報告」の中でホルブルックは郊外の村に四回医療訪問し、その結果外国人とキリスト教に対する反感が少しおさまり寛容になった上、表面上敬意すら見られるようになり、着実に中国側の反応が改善されていることを伝えた。そして教会の礼拝に出席するものはほとんど診療所の患者であり、ある安息日の礼拝には妻の回復を感謝するために出席した二人の夫の姿があったという。この妻たちは診療所に来る前、既に身内が葬儀の準備をしていたほど重篤な状態にあった。通州診療所の医療により妻たちが命をとりとめたので、この男性二人は毎週礼拝に参加するようになり、また「棺からよみがえった」妻の一人は熱心にキリスト教に耳を傾け、毎日祈りを捧げ、そして自宅で定期的にキリスト教の勉強会を主催するようになった。家庭訪問も頻繁になり、医療にともなう伝道だけでなく、医師が同行しなくても多くの家庭が女性宣教師に開かれ、歓迎の上キリスト教の話に耳を傾けるようになったと、着実に医療伝道が成果をあげていることを報告した^①

ホルブルックの一八八六年四月の書簡によれば、中国の医療伝道の手法には、ヘリベラル型 (liberal)、保守型 (conservative) と攻撃型 (aggressive) の三種があるという。第一のヘリベラル型は、ほとんど儒教寄りの立場で、文明化を推進するものを指す。彼

らは儒教を中心として、「接ぎ木」(graft) できる部分にだけキリスト教を継ぎ足そうとする。このヘリベラル型の教育と医療事業は中国人による外国人への偏見を除去するためには役立つが、中国人をキリスト教に導くことには必ずしも成功していない。したがって救世主のためではなく、「西欧文明」伝播を中心とする努力にすぎないという。第二の保守型についてホルブルックは詳しい説明をつけていないが、一八一〇年のアメリカン・ボードの設立以来標榜され、一八三二年から一八六六年まで幹事を務めたルーファス・アンダーソンを中心に展開された「伝道中心」――説教、福音の直接伝播活動――の伝統的な伝道方針を指すと思われる。この立場では、教育や医療事業は伝道のきつかけをつくるための二義的意味しか持たない。これに対し、ホルブルックの主張する「攻撃型」とは、第一と第二の型の《積極的な折衷型》とも評価できる。すなわち、この立場では、まず現場の人々が最も必要とする「科学」の知識や技術を伝授する。多くの中国人は聖書には聞く耳を持たないが、自分たちが必要とする科学の真理には耳を傾け、意欲的に勉強する。その際、宣教師はクリスチャン・サイエンスの書物や学校を提供することによって、自然科学全域の探求へと中国人を導く。すると、自然科学の真理は、どれも自ずと神の造った自然、神の真理につながる。中国人は自然にキリスト教に導かれることになるのである。ホルブルックの考えでは、医療伝道というものは伝道を開拓する第

一歩となるもので、伝道開始に当たって最初に必ず必要なものと位置づけた。したがってどのステーションにも診療所を持つ医療宣教師が必須であり、理想的には各ステーションに男性医師と女性医師の両方を必要とする。一八八六年四月アメリカン・ボードの北中国ミッションでは天津と北京を除く全てのステーションに診療所があった。北京では他教派のミッションによる診療所があったが、女性向けの診療は行わなかった。⁽¹⁸⁾

こうした医療伝道の進展の報告の一方、ホルブルックの書簡では、後に日本から発信した書簡と比べて、一貫して中国の《異教ぶり》、《不潔さ》、《騒音》、《偶像崇拜》に対して嫌悪感を持ち、「犬を操る魔術師」にも不快感を表す姿が目立つ。ホルブルックにとって中国伝道の世界はこうした外界と天と地ほどの差があるミッション居住区とに二分されており、「汚い外界」から一歩ミッション居住区の門をくぐると「私の疲れた目に美しく咲く花とつる植物が入り、それはまるで私にとって《命の木》のようなもの、ここは本当に休息をとれる喜びに満ち溢れた天国、平和な空間、私にとって再び帰ってきた『ホーム』だ」と記す。⁽¹⁹⁾ 本国出発前に旅行記や宣教師の情報をも十分読んで準備してあったために予想外に強烈な衝撃を受けることはなかったが、目の当たりにするたびに自分がアメリカのキリスト教に基づく自由を知っていることに感謝し、また専門の医療活動があったからこそ気を紛らせて自分を支えることができたという。

さらにホルブルックは赴任前にボストンの診療所でボストンに当時増えていた貧民の医療にあたった経験のおかげで文明国にも異教的で野蛮な風土があることを知っていた。ホルブルックは、この経験も自分が中国伝道に耐えしのぶ糧と活力の原動力となっていると本国ボード宛ての書簡に自分を励ますかのようにつつづいていた。⁽²⁰⁾ しかし中国の通州は気候が体に合わず、心労が重なった。結局ホルブルックは念願の医療事業に従事できたにもかかわらず、着任の翌夏にはコレラにかかって下痢に苦しみ、それ以来痘瘡や日射病等危険な病気を繰り返し、ついに一八八六年夏には二年前と同じく腸に潰瘍ができてそれが穿孔しかねない死の危険に直面することになった。乾期も七、八月の湿気のひどい雨期も体調に合わず、医師からもうひと夏滞在すれば命を失う危険があると診断された結果、一八八六年一〇月失意のうちに翌一八八七年春の帰米を願いだした。⁽²¹⁾

結局ホルブルックは一八八七年五月、北中国ミッションを離れ、帰路仙台に二週間立ち寄って七月アメリカに帰国した。故郷ロッキランドから帰国後三回にわたってホルブルックは後任について言及する。⁽²²⁾ この中で強調されたのは、既にインガムという男性医師が一人いるので、後任として男性ではなく女性の医療宣教師の派遣を要請したことだった。あわせてホルブルックは女性医療宣教師の有益性を以下の二点を根拠に主張した。第一に後任が男性医師になると女性を対象とする往診の要請が途絶えて、その結果中国家庭に接触

するという伝道の大きな糸口を失い、伝道拡大の可能性が閉ざされてしまう。診療所での診療自体はこれまでホルブルックを補佐していたシェフィールド夫人のような女性の助手が男性の医療宣教師を補佐すれば、大方カバーできる上、女性の患者も訪れるだろうが、明らかに女性患者の総数は激減するだろう。その上ただちに女性患者のいる家庭を往診することができなくなり、新たな中国女性や家庭との接触を開拓し、他の宣教師に新しい伝道場の提供することはできなくなる。すなわちこれまでは診療所を訪れた女性患者への伝道が伝道の拡大のためにきわめて有効だったので、男性医療宣教師が後任となると失われるものが大きいと訴えた。第二に後任として男性の医療宣教師が赴任すると、これまでこの仕事を支援してきたニューイングランドの若い女性たちを裏切ることになると伝えた。本国の若い女性たちは女性医療宣教師による中国女性のための診療所という特別目的のために献金してこの診療所を実現したので、その資金が結局男性のために使われてしまうと失望と不信感を抱き、今後の献金について消極的になるという。⁽²³⁾ すなわち女性医療宣教師による中国女性対象の医療伝道は中国とアメリカそれぞれに支配的だったジェンダーが男女別の領域を前提にし、また中国の場合、その領域の壁が強固であったからこそ成立した事業だったと言える。

ホルブルックは自分の後任として中国の張家口(Kalban)にある診療所所属のマードック女性医療宣教師の案が上がり、その後任と

して女性医療宣教師ではなく男性医療宣教師を欲しいと言っているという情報を耳にする。これでは女性宣教師の総数が一名減ることになるので、このいきさつこそ中部ウーマンズ・ボードが資金援助を断り、アメリカン・ボードに資金負担を移した方がいいと言った根拠だとホルブルックは理解した。ホルブルックは以前それとなくマードックに通州診療所に関心があるか打診したところ、あっさり「希望しない」という返答を得ていたので、後任としての交渉は慎重にした方がいいと本部ボードに助言していた。しかし、その後通州への任地変更の提案の出所がウーマンズ・ボードではなくマードック本人だったということをホルブルックは知り、自分が後半堂々と男性患者の診察を断り、彼らを北京に送り込んでいた事実を知ってマードックがその気になったのではと遺憾に思った。なぜならホルブルックは自分だからこそそのような行動をとれたが、マードックの人柄では男性だからといって患者を拒むことなどできないと推察したからである。ホルブルックはマードックには医療技術に加えて患者の心をつかむ素晴らしい才能があるので通州に転任するのではなく、そのまま張家口で良い仕事を続けて欲しいと綴った。

この一八八七年八月の書簡においてホルブルックは葛藤の末、中国での伝道活動を断念した苦しい胸のうちを吐露した。仕事の内容も通州の人々もシェフィールド夫妻も申し分なくすばらしかったが、健康上もうひと夏生き永らえる可能性がほとんどなく、それでも留

まることにステーションが断固反対したのだった。次の任地についてはアフリカのズル・ステーションの案も提示されたが、ホルブルックは帰路日本に立ち寄った経験から既に強く日本赴任希望の意思を固めていた。「アフリカの一名に対し、日本には宣教師が五〇名行っている」が、中国からの帰路二週間滞在したところ、「まるで砂漠から肥沃な谷に来たよう」で「ひとりひとりの宣教師が持ちうる影響力の大きさと五〇名でも足りないほど大きなニーズがあることを知って」是が非でも日本赴任を希望した。日本人も日本語も中国人や中国語と関連があるので他の地に行くより容易に仕事に入れるとホルブルックは考えたのである。ただし、医療伝道の仕事がないことを知っていたのか、「唯一躊躇するのは仕事にあまり魅力がないことである」と付記した。⁽²⁴⁾

三 日本でのホルブルックの教育伝道

日本に魅せられたホルブルックは一八八七年夏に帰米後、一八八九年秋に日本へ出発するまで、母校マウント・ホリヨークで教鞭を執りながら、日本伝道に向けて自分の夢を膨らませていった。ホルブルックには通州の診療所拡張の際、中国女性に医学の専門知識を伝授する学校設立の願いがあったように、女性の高等教育に女性の地位向上、改善の可能性を見て大きな関心を寄せていた。おりしも一八八七年帰米したとき、母校マウント・ホリヨークでは学位授与

権を持つ高等教育機関としてマサチューセッツ州の認可を受けるべく、カレッジ昇格運動の機運が盛り上がっている最中であった。ホルブルックは学長をはじめとする教職員の依頼でその運動の中心的担い手としてこれを推進する。既にカレッジと名乗るに十分余りあるその教育内容を一層充実させ、引き上げていくことで学内は一致していたが、マウント・ホリヨークの謙虚な姿勢と卒業生中心の教授陣で小規模の基金で成り立つ教育方式の伝統を守るべく、名称はセミナリーのままにするべきという意見と学位授与権の入手とカレッジ昇格を果たし、名称もカレッジと改称することを主張する意見に割れていたのだった。後者推進派には、マウント・ホリヨークの理事のひとりでもあったアメリカン・ボードのN・G・クラーク幹事とマウント・ホリヨーク同窓会会長でもあったアメリカン・ボードの中部ウーマンズ・ボード会長エミリー・ホワイト・スミスもいたのである。同窓会内部では東部支部が前者を支持し、エミリー・ホワイト・スミスを筆頭に西部支部は後者を支持した。ホルブルックはこの論争の中で、現時点ではとにかくまず学位授与権の獲得に専念すべきで名称の問題はその次という方針を固めた。マサチューセッツ州議会にクラークら三人の理事が請願するにあたり、ホルブルックはその点を盛り込んだ「マウント・ホリヨーク議案を可決すべき理由書」(Reasons Why the Mount Holyoke Bill Should Pass)を書き、これを同窓会ポストン支部が三〇〇〇部印刷し内三〇〇部を

マサチューセッツ州議会の議員に配った。結局、学位授与権を持つカレッジ昇格を果たし、同時にマウント・ホリヨーク伝統の教育方式を守る象徴としてセミナリーの名前も残し、一八八八年三月八日 Mount Holyoke Seminary and College と改称したカレッジ憲章が正式に認可された。⁽²⁵⁾

ホルブルックは女性の地位を向上させるためには霊的な発展と高度な知識と思考力が肝要と考え、それを両方可能にする理想形はマウント・ホリヨークのようなキリスト教主義女子高等教育機関にあると考えた。ちょうどマウント・ホリヨークがキリスト教を伝播して世界の女性の地位を向上すべく、世界各地に宣教師として赴任する卒業生を多く送り出したように、アジアの日本にもマウント・ホリヨークを創りたいという希望を持つようになる。折しもマウント・ホリヨークで教えていたので、その中から自分の計画のパートナーとして組めそうな人材を募った。その結果コラ・ストーン、キヤロライン・テルフォードとエミリー・ウィルキンソンを誘って、一八八九年以下の「日本でのマウント・ホリヨーク設立計画案」をアメリカン・ボードの運営委員会に提出する。

以下三名と私は日本に下記のような方法でマウント・ホリヨーク・カレッジを設立することを希望します。まずその資金は現地人から募り、十分発展した暁には生徒に十分な高等教育の恩

恵を提供します。その目的はちょうどアメリカのマウント・ホリヨークが世界に貢献できたように、日本の若い女性が将来日本および近隣諸国のために有用に貢献できるよう、招集の可能性があるのあるあらゆる領域の訓練を施すことにあります。

しかしこの案は運営委員会に却下される。ホルブルックは失意のうちに、この計画を断念して日本ミッションが任命する仕事なら何でも受け入れる用意で一八八九年一〇月日本に到着した。

ホルブルックは日本到着後岡山と鳥取にそれぞれ一年赴任し、神戸英和女学校（現、神戸女学院大学）への着任は一八九一年一二月まで待たねばならなかった。しかしながら、日本に到着する前からマウント・ホリヨークと日本とのパイプ役として日本女性の高等教育推進のための運動に積極的に関与していた。中国での経験と帰米中二年間のマウント・ホリヨークでの教師としての経験から女子の高等教育について明確なヴィジョンが形成されていたので、ホルブルックは来日直後から神戸英和女学校の高等教育推進の強力な牽引力となっていく。一八八七年春北中国ミッションから帰国する途上、仙台に立ち寄ったときアメリカン・ボードの宣教師ジョン・H・デフォレストから日本伝道の急激な発展と特に女子教育の分野で大きなチャンスが到来していることを耳にしていた可能性が高い。一八九〇年一月の第一信で日本到着前デフォレストからアメリカン・ボ

ードのミッション・スクールのもっとも優秀な若い女教師の数名がマウント・ホリヤークで勉強できるように必要な手配をするよう依頼されたと報告し、アメリカン・ボードのクラーク幹事の同意を促す。自分が着任早々「女性の改善協会」で二回スピーチを頼まれたとき、神戸英和女学校の卒業生で岡山の女学校の教師となっている女性が事前の知識なしに流暢に日本語への通訳を務めてくれたことから神戸英和女学校の教育水準の高さに目を見張る。一方日本ではキリスト教主義の全寮制の女学校が急速に増えており、またその教育水準も年々上昇しているので高等教育を受けた優秀な女性校長の需要が拡大しているのに神戸英和女学校の現在の教育ではスピードも質も到底供給が間に合わない。こうした将来の女性校長を養成するために神戸英和女学校の卒業生はさらに高等教育を受ける必要があるが、東京の帝国大学を受験した二名も女性であるがゆえに入学を拒まれたし、日本国内には彼女たちが入れる高等教育機関がない。従って即刻数名アメリカに留学させるべきだ。日本の明るい将来のためにマウント・ホリヤークがもっともよい留学先と考えるし、マウント・ホリヤークは学費その他の奨学金を用意してくれる。旅費は日本で何とか賄える²⁶。

こうしたホルブルックの論理はそれまで二人の女性宣教師エミリー・M・ブラウンとスーザン・A・ソールが一八八五年以降神戸英和女学校をカレッジに昇格させようと運動していたにもかかわらず、

これに消極的だった本国ボードのクラーク幹事の態度を軟化させた。神戸英和女学校の卒業生で将来ミッション・スクールの校長になる人材がアメリカ留学する費用を持ち続けることに比べて、神戸英和女学校自体を高等教育機関に昇格させる方がずっとコストが安いとクラークは考えたのである。ホルブルックはそもそも自分たちが提案した日本マウント・ホリヤーク設立案が却下されたので、日本のミッション・スクールของ高等教育昇格案はあり得ないと思って、マウント・ホリヤーク留学案を提示したのだと説明し、クラークが神戸英和女学校のカレッジ昇格計画自体に前向きになったことを歓迎した。しかし同時に神戸英和女学校をカレッジに昇格させるためにはそれぞれの学部長を務める日本女性の教師を卒業生の中から早急に養成する必要があると説明し、ブラウンやソールが望む数名をマウント・ホリヤークに留学させる計画も並行して進めるようにもつていく。その理由は日本社会のなかで神戸英和女学校が正當に認知されるためだった。ホルブルックは日本ミッションのほかの女学校に比べて神戸英和女学校が優位に立つのは経営権がミッションにあるからと指摘する。また今後もしばらくミッションによる経営が続くものの日本社会に認められるためには外国人教師に依存した経営では不十分で、日本人教師の資格や適性を注目されるのだから将来学部長を務める二、三名の優秀な若い女性をアメリカに留学させ、特別な準備を受けさせることが肝要だと説いた。その結果、神戸英

和女学校（一八九四年神戸女学院と改称）で英語教師として有能だった宮川敏（幼名マーサ・ギューリック）とすでに鳥取女学校の校長を務めていた山脇花（後再婚して大島花と改称）のマウント・ホリヨーク留学が実現し、それぞれ一八九三年文学学士、一八九五年理学士を得て卒業し、母校神戸女学院で英語教師、理科教師として教鞭をとった。宮川敏はもとも中国生まれで一八六九年に宣教師ジョン・T・ギューリック夫妻が北京から張家口に移動中、中国人の両親に捨てられそうになっていたのを養女として引き取って来日し、フェリス女学院と神戸英和女学校で教育を受けさせたのだった。卒業後神戸英和女学校で優秀な英語教師として働いている間本国の母と通州のミッション・スクールに通う弟に定期的に送金していたので、ホルブルックとはとりわけ深い縁があった。

ホルブルックは日本ミッションの中で「神戸英和女学校を拡張する委員会」のメンバーに選ばれ、益々カレッジ昇格推進計画に傾倒していく。一八九〇年九月には来日前にあきらめたマウント・ホリヨーク設立案より結果としてより広範囲で良い案に生まれ変わったと目を輝かせる。すなわち目指すのは「単にホリヨークやウエズレーやカールトンモデルとするカレッジではなく、それぞれの長所をあわせ持った女性のためのクリスチャン・カレッジであり、しかも新しく創設するのではなく既にある女学校が自然に拡張発展したもの」だった。

一八八九年二月アメリカン・ボードと日本ミッション双方からカレッジ昇格を承認され、計画は実施に移されていく。まず一八九一年一月カリキュラム改革が行われ、三年制のカレッジが開設された。この改革で文学部と理学部が設立される。それまでの一年制ないし二年制の高等科は英文科と漢文科だけだったので理学部は新設された学部だった。この開設準備と運営のために翌一八九二年九月ホルブルックは神戸英和女学校赴任を命じられる。これに先立つ一八九〇年十一月、アメリカン・ボードのクラーク幹事は神戸英和女学校を担当する中部ウーマンズ・ボードのエミリー・ホワイト・スミス会長とカレッジ拡張の支援策について協議した。その結果中部ウーマンズ・ボードがこの目的のために一万二〇〇〇ドルの特別費の募金を行うことになり、翌一八九二年これを達成した。中部ウーマンズ・ボードが同年残り全ての海外伝道事業のために集めた募金総額が六万八六〇五ドル九四セントだったので、カレッジ拡張特別費は実に二割を占めていた。神戸英和女学校が中部ウーマンズ・ボードにとっていかに中心的な事業だったかがわかる。

神戸に着任したホルブルックは理学部開設準備の傍ら、カレッジに入学する学生全員の必修コースとして新設される「家庭衛生学」も担当することとなった。ホルブルックはこれこそ医師が担当するのにもっとも適任の授業であり、自分の専門知識が生かせる上、日本と中国の家庭生活は似ているので、自分の中国での経験も生かせ

ると期待に胸躍らせた。この授業は日本女性が将来、知性、健康と幸せに満ちたクリスチャン・ホームを築くために、母親として最も必要な知識を伝授するものであり、日本社会全体で成果が実感できる影響を及ぼすだろうと考えた。この新しいカリキュラムの試みは本国でエレン・シュワーツ・リチャーズが、理化学や工学を家庭の営みに応用して一八九〇年代家政学という新しい分野を開拓し、家政学運動の指導者となったこと、またマサチューセッツ工科大学に一八八四年に開設された化学研究室で衛生化学を研究し、水質、下水と大気を調査分析し、その結果を一八九〇年代に衛生工学に応用した流れに類似する。ホルブルックがリチャーズの研究を知っていたか否かを裏付ける資料はないが、神戸女学院で開設した「家庭衛生学」について「すべての成人した娘が実用的に理解していることが必要なので、本国の少女たちにも教えたいと常々望んでいた授業」と記している。リチャーズが得た高等教育に近い水準の理科高等教育を本国でほぼ同世代に受けたホルブルックが偶然同じく「家庭」に衛生学や理化学を応用する必要性を見出していたと推察することもできよう。基本的にホルブルックはこの授業で病人の看護の方法、家庭の衛生、事故や緊急時にとるべき行動や母であることや子育てについて教授したが、ホルブルックはさらにこの概念を「日本の家庭生活に応用する方法を開発することを目標」とした。すなわち具体的には「醸造所で発酵させた米からどのようににイースト菌

を発酵させるか」また「床に布団を敷いて寝る日本人の習慣とは別に病人のためにどのようなようにもつと快適なベッドを作ったらよいか」といったテーマの研究である。ホルブルックはまた他の理科の授業は学生に宗教と理科が密接に関連していること、つまり理科教育は神の真理の一部がこの世に具現する実例として示していける機会と捉えた。すなわち、ホルブルック自身が中国での医療と伝道活動について示した前述の類型によれば、ホルブルックは第二の「攻撃型」だったといえる。ホルブルックにとって理科教育は神の存在を確認できる場であつたので、理科教育に加えて日曜学校でクラスを担当し、生徒と朝の祈りを共にすることにも意欲的だった。神戸英和女学校の生徒たちは高度な英語力を備えているので、強固なクリスチャン女性に仕上げられる可能性は高く、学校教師やクリスチャンとして彼女たちは日本の内陸部に入って大きな影響力を及ぼすだろうとホルブルックは考えていた。⁽²⁸⁾日本の少女たちの真剣な眼にホルブルックは「まるでマウント・ホリヨークでメアリ・ライオンが担当した最初の生徒たちようだ」と目を細める。⁽²⁹⁾

ホルブルックはカレッジ拡張のため、自ら新しく建設する理科学館や音楽館の設計図を引いた。カレッジ建設委員会の委員もつとめ、自分で設計したために殊の外安価に新しいキャンパスを建てたと日本ミッションはたたえる。理科学館には実験室も設けられ、生徒には実物をみて実証的に理科を学ぶ環境が整った。この二つの建物の

落成にあたり神戸英和女学校は一八九四年日本語で神戸女学院、英語で Kobe College と改称した。

しかしちょうど神戸女学院と改称し、カレッジが開設されたころ、対外的には日清戦争が勃発し、キリスト教に対する反感が高まり、女子教育に対する締め付けも厳しくなってきた。生徒数は減少し、ホルブルックが夢を抱いたカレッジの理学部でも生徒は集まらず、ホルブルックは苦悩する。一八九五年三月の書簡では日清戦争の勝利以来、この「誇り高い『文明国』(“civilized but proud”)では日本人が外国人の介入を拒むようになり、宗教教育も教会も学校も経営権を外国人から取り返して外国人の資金も拒絶し、全て日本人が掌握しようという傾向が強まっていることを報告した。熊本での宣教師住居売却事件や同志社女学校の明治一八年事件や同志社での理事会と宣教師の衝突といった流れは神戸女学院でも発生した。前述のホルブルックと縁の深い宮川敏ら二人の日本人女性教諭が一八九四年夏、学校の経営権を日本人に明け渡すよう、宣教師に迫ったのである。彼女たちは宣教師に「名目上の校長、会計と創立者を日本人の間から選ぶように」という請願書を提出し、その結果文部省の認可を受ければ生徒数が増加し、設備を安く整えることができるなど、学校の存続が安定すると主張した。先の一八九五年三月の書簡で今後伊藤博文や陸奥宗光が政権を追われ、代わりに軍部が台頭し、日露戦争も不可避であろうと予見していたホルブルックは教育勅諭

を軸にナショナリズムが高まっている現時点こそ、神戸女学院の理念を維持するため、経営権を死守するという決意をソール、ブラウンとともに固めた。デフォレストら二人の男性宣教師を除いて日本ミッションは全員この決断に賛同し、「ソールがこの事件の指導者であった二人の教師を呼び、このような学校で教えるのが嫌なら他の学校に移ればよいし、また生徒が当校の教育内容を拒むのであれば、閉校するが、貴方たちの要求には一歩も譲らないと声明した」とホルブルックは同年一月伝えた。この結果、宮川敏が翌一八九五年六月辞任してこの事件は幕を閉じた。

ホルブルックは神戸女学院に一八九四年に落成した理科学館で行う三年制の理学部の高等教育に大きな期待と希望を寄せていた。設備の整った実験室がそろったので教科書で学ぶ理科ではなく実験と実証研究を重視するカリキュラムを作成した。一年に理科を二科目履修し、毎日午前と午後三時間ずつ実験室と教室での研究を週四日行うことを課し、これに実験器具の準備や片付けも加わったので高度で長時間に及ぶ教育内容だった。一科目につき週四日の実験なし研究時間というカリキュラムは一八八八年カレッジ昇格を果たしたマウント・ホリヤークのカレッジのカリキュラムとまったく同じだった。⁽³⁰⁾ 翌一八九五年には課外活動としてサイエンス・クラブを開始し、学生がさらに課外で実験室を使って実験を行い、科学研究を行うことを勧めた。一八九六年一〇月一回目の例会が開かれ、同窓

会報『めぐみ』によれば例会は一八九九年二月まで続いた。参加した学生は理学部のごく少数だったが、その数名は間瀬八重のように「液体空気の驚くべき現象」「心臓の形態及び位置の変動に就き」といった高度な研究を行い発表した。一九〇二年にマウント・ホリヨークの化学研究室で助手を務めていたオリヴ・S・ホイットを女性宣教師として確保すると化学と物理学はホイットに任せ、ホルブルックは植物学、動物学、生理学と衛生学を担当した。

ホルブルックの門下生で母校神戸女学院の理科と数学教師も務めた井深花によると「ホルブルックはほかの普通の宣教師と異なっており、神戸女学院の教育の使命は理科教育にこそあると信じていた」という。一九〇一年東京に日本女子大学校が設立されるとホルブルックはこれを意識し、神戸女学院がカレッジと名乗る以上「真のカレッジ教育」を提供すべきだと考えた。そのためマウント・ホリヨークが前述の一八八八年カレッジ昇格を果たしたときに男子の大学レベルに匹敵する理学部を二つのカレッジ・コースのひとつとして提供したように、神戸女学院でも理学部こそカレッジの金字塔となると考えた。ホルブルックの熱意にもかかわらず、一八九九年高等女学校令が發布されて日本政府による女子教育が整備されていくと神戸女学院では生徒数が益々減少し、特に理科高等教育は入学者が全くいない学年もあって学部全体でもごく一握りの学生しかいなかった。それでも日本では先駆的な理科の高等教育を受けた少数はその後さ

らにアメリカに留学し、帰国して教鞭を執るものが多く、日本のバイオニア女性理科教師となった。またホルブルックが構想したように家政学教育に従事して科学の原理にもとづいて日本の家庭の近代化に貢献するものもあった。前述のマウント・ホリヨークに留学した井深花も明治学院の総理井深梶之助と結婚し、子育てしながら東京の学校で家政学、植物学、動物学、化学、物理学、生理学、幾何学を教え、さらに日曜学校、婦人会、母の会で活動し、神戸女学院や東京女子大学の理事を務め、また日本基督教婦人矯風会の常置委員、副会頭やYWCA同盟委員長も務めた。一八九二年に高等科を卒業した雨夜ひさは母校や同志社女学校で教鞭をとった後カールトン・カレッジに留学してやはり理学学士を得たが帰国後香蘭女学院奉職中に夭折した。同じく一八九二年に高等科を卒業した塚本ふじはペンシルベニア大学ウィルソン・カレッジに留学して生物学を専攻し、大学院一年まで研鑽を積んで帰国した。帰国後神戸女学院の理学部で植物学を担当し、植物採集や星座観察をするなど実物教育を行った。

一方、前述のサイエンス・クラブで研究報告を行った間瀬は一九〇二年高等科を卒業後岡山市の高等女学校で四年間教鞭を執り、その後ミルズ・カレッジに留学した。ミルズ・カレッジもマウント・ホリヨークと同様、神戸女学院の卒業生を対象に学費と生活費に相当する奨学金を提供してくれたのである。この一名の枠は間瀬がミ

ルズ・カレッジを卒業すると続けて次の卒業生を送り込める神戸女学院卒業生指定の枠だった。間瀬は理学士を得て卒業後マウント・ホリヨークで一年さらに研鑽を積み帰国した。同窓会宛てに送った書簡によると、間瀬はマウント・ホリヨークで念願の動物学を学ぶ喜びを語る。また津田梅子も参加したことのあるウーズホールの水産講習所で開催される夏期の普通講習に参加するなど、勉強する機会と研究環境の充実により、当初の一学期の予定を延ばして、結局一年滞在することにしたと伝える。ウーズホールは本来博物学や動植物学の研究者が来るところだが、八週間の夏期普通講習は朝一時間の講義のあと午後四時まで実験の毎日で、受講生は性別も人種も問わず世界中から集まっていた。また週二日は夜ハーバード、エール、シカゴ大学等全米の著名な大学の教授の講演が聞けるほか、週一回開かれる研究報告会が有益と伝え、各分野の世界的第一人者の研究者の講義を聞いて討論にも参加できる自由闊達な研究風土に魅了されていた様子である。⁽³¹⁾ 間瀬は帰国後同志社女学校の家政科主任を長く務めた。着任後ほどなくして同志社女学校同窓会発行の『女学校期報』第三九号に「家庭に於ける家事教育」と題する小論を寄稿し、「家事は凡そ科学の応用に外ならない」と述べ、「物理、化学、博物の知識が不十分では食物の研究も家屋の保存も衣服の始末も完全には出来ず、生理学、心理学、教育学の素養なくては育児法に適った子女の教育は六ヶ敷理であります」という。アメリカの

家庭に比べて「他の進歩の割合に」日本で「一家の最大切なる健康を産み出す所の」台所の改良が遅れているのは「我婦人に理科思想の貧弱であることが大なる原因である」と説き、料理、育児、家庭内衛生や衣服の管理に合理的にあたるためには科学の正しい知識を持ち、科学の原理を理解することが肝要だと主張した。そして理論の理解と同じ位、実習することが大切と強調した。同志社女学校では実習室が整備されており、間瀬は実習教育も盛んに行った。とはいえ学校の実習室では生徒全員が十分に実習できるわけではないので、間瀬は前述の「科学者にして家政学者の泰斗として斯界に名声高きリチャーズ夫人」の説を引用して高等女学校ではじめて家事を実習するのでは遅いので、七、八歳のころから家庭で慣れ親しんでおくことを薦めた。⁽³²⁾ 間瀬が教授した化学原理に基づく合理的な洗濯方法は当時の日本において先駆的で注目を集めたのか一九二四年（大正十三年）一二月貞明皇后の行啓を迎えた。皇后は普通部四年の生徒が白木綿の洗濯を西洋洗濯実習室で行うのを見学し、洗濯器及び絞り器、そして青みつけを興味深く観察した。また洗濯物を釜で煮るのを観察し、洗濯物は袋に入れて煮るのかと質問した。さらに皇后は洗濯液について、木綿と絹織物の洗濯法の違い、そして日本製糊について詳細に質問して間瀬の説明に熱心に耳を傾けたという。⁽³³⁾ このように間瀬が同志社女学校で理科の原理や専門知識を応用した家政学を教授し、日本の家庭生活にこれが適用できるように具体的

な事例で実習教育を行ったのは、日本の家庭改良と近代化につながる重要な貢献だったといえる。まさしく間瀬はホルブルックが神戸女学院の理学部の教育で目指していた日本社会の家庭改良、生活改良の構想を継承して、一つの道筋を提示したといえよう。

反キリスト教の風潮が高まる中、神戸女学院の土地建物を日本人の手から守ることに腐心したホルブルックは心労が重なって再び健康を害した。前述の井深花が帰国し理科教育を任せることができた上、カレッジの理学部には学生がいなかったため、一八九六年帰国した。しかし理学部の存続の夢を捨てきれず、これが廃止の危機に瀕すると再建するために一九〇二年から一九〇五年と一九〇七年から一九一〇年神戸女学院に戻ってきた。糖尿病を患って体がぼろぼろになっていたホルブルックはついに一九一〇年四月帰国し、ニューヨークランドのふるさとに戻ったわずか数日後弟の家で息をひきとった。享年五六歳だった。

四 伝道地の主体性、宣教師の専門知識、伝道、女性の地位向上をめぐる

ホルブルックの中国からの書簡と日本発の書簡を比べてみると、中国では《異教ぶり》への言及が目立つのに対し、日本では日清戦争後、《文明国》となった日本の誇りと外国人から《独立》しようとしていることの描写のほかには違和感を伝える記述はない。むしろ

ろ一八八〇年代の北中国を「砂漠」(desert)にたとえるなら一八九〇年代初めの日本は「肥沃な谷」(fertile valleys)で「ほっとする」場所とみる (Holbrook to Dr. Smith, 1887. 8. 13)。逆に日清戦争後は勝利した日本では政府の統制や監視が厳しくなって宣教師が活動できる余地はほとんどなく、むしろ負けた中国の方にこそ伝道のチャンスが広がったと宣教師はみた。実際一八九三年二月の書簡は中国では宣教師書簡として本国の女性に魅力的な《異教ぶり》や貧困、迷信や貧苦を伝える話題に事欠かなかったが、日本では特に学校業務に関わっているため、それを見つけるのが難儀で、個人的なつながりのない人物に伝えても面白い話題はなくて苦勞すると記す⁽⁴⁾。このことは宣教師が接触した女性は中国より日本の方が恵まれた境遇にあったことを示唆し、合わせて中国の方が日本より貧富の差が大きかったことを示すのかもしれない。いずれにしろ、ハンターが指摘したように、一九世紀後半において中国で宣教師が接触しえた中国女性には貧困層であり、日本では宣教師の来日がたまたま幕末維新の社会の大規模な変革期にあたり、宣教師が接触したのは新時代への切り札を求めた知識人であった旧士族が中心であったことを裏付ける。

このように対照的な境遇の女性たちを伝道対象としたとき、ミッションは現地の女性が多数集まる事業に力を入れ、宣教師を配当した。つまり現地社会では未開拓であるもののニーズの高い事業であ

る。それが北中国では医療伝道であり、日本では女子教育だった。ここに伝道地側の主体性によって伝道活動の方向性が決まることが明らかになった。

さて、医療技術と医学知識をもっていたホルブルックは伝道地によって医療活動ができる場合とできない場合があったが、本人はそれをどのように捉えていたのか。つまりホルブルックにとって医学専門知識と伝道はどのような関係にあったのか考察したい。そもそもミシガン大学医学部を志望した動機は海外伝道の仕事のために自分の有用性を高めることにあった。医療活動を行うのも身体を治療したら次に「霊の医師」として現地人の霊の治療にあたるためだった。来日後の第一信では自分が病人の治療を行っていないのは奇妙な感じがすると正直に伝える。しかしクラーク幹事が日本での医療活動の可能性について問うと、ホルブルックは十分日本人のすぐれた医師がいるためにそれは不可能であると返答した。すなわち具体的に日本人の医師はホルブルックが勝手に病人に薬をわたすことを批判し、また日本で薬を入手するためにはそもそも日本人医師の処方箋が必要という規制が加えられていた。最初は教会や学校関係者すら診ることができなかったが一八九一年六月にはそれは許されたものの入手した薬を公に使用することは禁止されているという。「日本人医師は嫉妬深い」とホルブルックは記すが、彼らは患者を宣教師に奪われることを警戒していたのかもしれない。このように

制限され、半ば監視された状況下でホルブルックが医療活動を行うことは伝道目的のためには「百害あって一利なし」だった。⁽³⁵⁾ホルブルックがマウント・ホリヨークに残した記録によると、ホルブルックの赴任時、日本には医療宣教師は派遣しないことがボードの方針としてすでに決まっていたようである。実際ホルブルック日本滞在中に日本にいたほかの男性医療宣教師の医療行為は日本人に対して医療伝道を行うのではなく、ミッション内の宣教師とその家族の診察に限定されていた。一八七〇年代にはベリーを初めとして医療伝道を行っていた宣教師もいるので、宣教師書簡、ミッション議事録やミッション・レポートにみられる伝道地での医療伝道の受け入れ方の変化を見て、本国ボードの伝道方針が決定されたと考えられる。ホルブルックの事例に限定するならば、ホルブルックにとって医療技術、医学知識、理科知識といった専門知識は先述のように伝道という究極の目的追求に自分が貢献できる可能性を広げるためのツールであった。北中国ミッションでコレラにかかり、歩き回る体力を失ったホルブルックは伝道旅行や訪問伝道はできないと自覚していたので、自分の健康を維持しつつ、専門知識を生かせる日本での教育事業を最終的に選択した。専門の医療に従事できないということは同僚ソールの書簡によれば、ホルブルックにとってはやはり無念なことであったが、通州での医療バイブル・ウーマンの養成、母校マウント・ホリヨークのカレッジ昇格運動や神戸女学院での理科

高等教育確立へ向けての献身をみると、ホルブルックにとって伝道の成果を見ることが現地女性の地位を向上させることはほぼ同等で同義の意味合いを持っていたように推測できる。ウーマンズ・ボードの基本レトリックとなっているようにキリスト教を伝播するところ、女性の地位向上につながるとホルブルックは信じていた。

そういった意味で前述のように理科の原理、現象は神の存在を現地の女性にも確信させるための有効な手立てであり、理科の高等教育を授けることは女性が社会や家庭を合理的に改良するツールを与えることであり、その結果女性の地位は向上する。したがってホルブルックの中では医療技術、理科教育、伝道と現地女性の地位向上は全て等号でつながっていた。第一の医療技術というツールが自分の健康維持と両立できなくなったので、日本伝道においてはそれを理科教育に切り替えたといえる。日本の女性の地位向上を願っていたホルブルックが理想とした日本女性は外見が完全な日本女性でありながら、内面はキリスト教に基づく広い視野をもつ真の国際人の日本女性であった。

おわりに

本稿では本国宣教師書簡を手がかりに、一八八〇年代から一九〇〇年代にかけて医学知識と医療技術をもつ一人の女性宣教師の目に、中国と日本というアジアのふたつの伝道地の事情がどのように

映り、自分の適性を照らし合わせながら、どのように自分の専門知識を活用して伝道活動をおこなったか分析を試みた。その結果、当時の北中国と日本では伝道対象の女性の社会階層が貧困層と知識人の旧士族と対照的であったために伝道地側が必要としていた事業も女性のための医療伝道と女子教育と異なったこと、そしてそのニーズに応じて本国ボードは伝道地ごとに伝道方針を固め、また宣教師も自身の活用できる専門知識を取捨選択して自身の健康との均衡点を探りながら伝道活動を進めたことが明らかになった。

医療伝道と女子教育では宣教師が伝道の成果を確認するのに要する時間に大きな開きがある。すなわち病苦に苦しむ患者が診療を受けて治癒して笑顔を見せるまで、そして素直にキリスト教に耳を傾け、教会に出席するまで、さほど長い時間はかからない。感謝する中国人の心に触れることによって、確実に成果を実感できるが、逆に伝道の成果が定着する確証を得るのは難しい。他方、女学校事業は授業の日課に追われ、果たしてキリスト教が少女たちに根付いているか、また彼女たちが卒業後、日本社会に戻ってどのような影響を及ぼすか、成果を見るまでに一〇年単位の時間を要する。従って日常の中で目に見える成果を確認するのは難しい。しかし多くの女性宣教師がそうであったようにキリスト教の伝播と女性の地位の向上を同義にとらえ、さらにこの等式にアメリカをモデルとする高等教育を加えれば女性宣教師は永続する成果を期待できる。

ホルブルックの書簡にみられた北中国ミッションでの医療伝道と日本ミッションでの女子高等教育事業の進展のなかには上記の対照的な特質を持つ伝道形態のなかで揺らぐホルブルックの心模様が感じられた。すなわち北中国ミッションで医療伝道活動に手ごたえを感じつつもその成果が消える不安から、永続する成果を残そうと医療バイブル・ウーマン・トレーニング・スクールという教育事業を創ろうと企てた。また中国伝道を断念した後、当時一番期待されていた日本ミッションでマウント・ホリヨークをモデルとする女子高等教育機関を創ろうと計画し、そしてその中にホルブルックの考える高等教育の金字塔、理科の高等教育を根付かせようと懸命に努力を重ねた。この一連の動きの中において最初は伝道地のニーズに対応した事業であったものの、最後の理科教育にあつてはホルブルックの悲願が伝道地のニーズに先んじてしまった観がある。しかしながら少数の日本人パイオニア理科教師はホルブルックの遺志を継ぎ、理科を応用した家政学によって日本の家庭の近代化に貢献した。受洗数は少なくとも宣教師は伝道地の家庭、生活様式や文化に目に見えない多くのものを残したのである。本稿の事例分析で伝道地側の事情と本国から宣教師本人が持ち込む伝道理念の双方方向のダイナミズムの結実として伝道活動が展開されたことが明らかになった。

注

- (1) Jane Hunter, *The Gospel of Gentility: American Women Missionaries in Turn-of-the-Century China*, (New Haven and London: Yale University Press, 1984), xiii-xvi. 「家庭性」(domesticity) とは一九世紀のアメリカ女性像を説明する理念の一つで、東部の白人中産階級を中心に、期待されていたいわゆるヴィクトリアン的女性像の規範―従順、敬虔、貞節、家庭性の四つの美德に象徴される―の一つを指す。女性たちは「家庭性」を拡大して、様々な社会改革運動に乗り出していた。Barbara Welter, "The Cult of True Womanhood, 1820-1860," *American Quarterly* 18, No. 2 (1966), pp. 151-174, Nancy Cott, *The Bonds of Womanhood: "Woman's Sphere" in New England, 1780-1835* (New Haven: Yale University Press, 1977) 参照。Karen Blair は "Domestic Feminism" という概念を用いて、女性が女性だけで組織化して「家庭性」を拡大し、公的領域への進出を正当化した理念を説明した。Karen Blair, *The Clubwoman as feminist: True Womanhood Redefined, 1868-1914* (New York: Holmes & Meier Publishers, Inc., 1980), pp. 4-5, 10, 48-51. 参照。
- (2) 特にメソジストの女性宣教師は医療伝道活動に大きな成果を見せ、ロバートによれば Foochow において一八八八年まで女性宣教師が男性宣教師に対してのみならず、一般中国社会の中でも医療事業を独占していたと云々。Dana Robert, *American Women in Mission: A Social History of Their Thought and Practice* (Macon: Mercer University Press, 1997), pp. 183-188. メン

- カン・ボート設立の Bridgman Academy を源流として例え、
The North China Union Medical College for Women がゆ。
- (3) Missionaries : Physicians, "List of Women Physicians under American Board in China," ABC (1 : 9), American Board of Commissioners for Foreign Missions papers, ハーバード大学ボートン図書館所蔵(以下 ABCFM Papers)。
- (4) マウント・ホリヨークはトロイ・セシナリー、ハートフォード・セシナリーと並んで、一八三七年にマサチューセッツ州サウス・ハドレーにメアリ・ライオンによって創設されたアメリカ最古の女子高等教育機関のひとつ。ラテン語、高度な理科教育など、当時の男子のカレッジに匹敵するほど、女子としては最高水準の教育内容を提供したことで知られる。全寮制で「クリスチャン・ホーム」の精神を育み、カリキュラムの一環として生徒に家事をさせて学費を引き下げるなど経済力のない家庭の子女にも門戸を広げたことを特徴とする。一八六一年には三年制から四年制に引き上げられたが学位授与機関としてセシナリーの認可は一八八八年まで受けられなかった。マウント・ホリヨークの教育理念と女性宣教師の関係については Amanda Porterfield, *Mary Lyon and the Mount Holyoke Missionaries* (New York, Oxford : Oxford University Press, 1997) に詳しい。マウント・ホリヨークの一八八八年から一九三五年の間の卒業生のうち一五八名がアメリカン・ボード派遣の宣教師として海外伝道を行った。"Mount Holyoke College Foreign Missionaries from the Classes of 1888-1935," ABC (2 : 10) ABCFM Papers.
- (5) "Holbrook, Mary Anna, M. D., non-grad., Class of 1878," "notes by Anna E. Edwards, Class of 1859." In her alumnae biographical file, Mount Holyoke College Archives 所蔵。South Hadley, Mass.
- (6) Holbrook to N. G. Clark, Tung-cho, March 1885, ABCFM Papers.
- (7) "Holbrook, Mary Anna, M. D., non-grad., Class of 1878," "notes by Anna E. Edwards, Class of 1859." In her alumnae biographical file, Mount Holyoke College Archives 所蔵。
- (8) Mary Anna Holbrook to N. G. Clark, November 14, 1881, ABC 16.3.12 v. 11, ABCFM Papers.
- (9) *Missionary Herald* (June, 1883), p. 208 神戸女学院大学図書館所蔵。
- (10) *Missionary Herald* (September, 1883), p. 346 神戸女学院大学図書館所蔵。
- (11) Connie Shemo, "《Able to Do Things of Which They Have Never Dreamed》: Shi Mei-yu's Vision of Nursing in Early Twentieth Century China," *Dynamis. Acta hisp. Med. Sci. Hist. Illus.* 1999, 19, pp. 330-331.
- (12) Jane Hunter, *The Gospel of Gentility : American Women Missionaries in Turn-of-the-Century China*, (New Haven and London : Yale University Press, 1984), pp. 192-196, 230-234.
- (13) ハウズホルブルックと同じベツシガン大学を卒業して、中国に赴任した他の女性宣教師に比べて一八七二年当時高学歴だっ

- た。Robert, *American Women in Mission*; 185. Kang Cheng ヲ Shi Meiyu の医療ミッションとして Connie Sheno, "An Army of Women: The Medical Ministries of Kang Cheng and Shi Meiyu, 1872-1937" (Ph. D. diss., SUNY-Binghamton, 2001) 参照。ふたりはメソジストの女性海外伝道協会 WFM の資金援助でシガン大学医学部を一八九六年に卒業し、メソジストの医療宣教師として帰国した。しかし二人はメソジスト経営の病院には所属せず、独自に中国人看護婦を養成し、自分たちのミッション病院を Jiujiang に設立する。Shi Meiyu はやがてこのメンフォース・メモリアル病院の付属機関として看護学校も設立した。Meiyu の思想と中国の医療とのつながりについて Connie Sheno 前掲論文 "Able to Do Things of Which They Have Never Dreamed" *Dynamis*, pp. 329-351 に詳しい。シーキはメソジスト中国女性のイメージをへ癒す女性へと変容する貢献をしたという。Hunter 前掲書、一九四―一九七頁参照。
- (14) Holbrook to N. G. Clark, Western Hills, Aug. 10, 1882, ABCFM Papers.
- (15) Holbrook to N. G. Clark, Tungcho, March 1885, ABCFM Papers.
- (16) Holbrook to N. G. Clark, June 15, 1883, ABCFM Papers.
- (17) *Missionary Herald* (September, 1883), p. 347 神戸女学院大学図書館所蔵。
- (18) Holbrook to Dr. Smith, Tungcho, April 17, 1886, ABCFM Papers.
- (19) Holbrook to N. G. Clark, Tungcho, March 3, 1882, ABCFM Papers.
- (20) Ibid.
- (21) Holbrook to Dr. Smith, Tungcho, October 1, 1886, ABCFM Papers.
- (22) Holbrook to 木蘭, Rockland, Mass., July 16, 1887, Holbrook to Dr. Smith, Brant Rock, Mass., July 27, 1887, Aug. 13, 1887, ABCFM Papers.
- (23) Holbrook to 木蘭, Rockland, Mass., July 16, 1887, ABCFM Papers.
- (24) Holbrook to Dr. Smith, Brant Rock, August 13, 1887, ABCFM Papers.
- (25) Arthur C. Cole, *A Hundred Years of Mount Holyoke College: The Evolution of an Educational Ideal* (New Haven: Yale University Press, 1940), pp. 180-200.
- (26) Holbrook to N. G. Clark, Okayama, January 15, 1890, ABCFM Papers.
- (27) Holbrook to N. G. Clark, Tottori, December 10, 1890, ABCFM Papers.
- (28) Holbrook to Mrs. Goodell, Kobe, 1893-2-6, ABCFM Papers.
- (29) Holbrook to N. G. Clark, Kobe, 1892-11-16, ABCFM Papers.
- (30) Cole, *A Hundred Years of Mount Holyoke College*, pp. 195-196.
- (31) 神戸女学院同窓会『めぐみ』第五一号(一九一〇) 一一二―一二五

頁。神戸女学院大学図書館所蔵。

- (32) 同志社女学校同窓会『女学校期報』第三九号（一九一六）、一二
一五頁。同志社女子大学資料室所蔵。

- (33) 同志社女学校同窓会『女学校期報』第五〇号（一九二九）、六一
七頁、三五一四頁。同志社女子大学資料室所蔵。

- (34) Holbrook to Mrs. Goodell, Kobe, 1893-2-6, ABCFM Papers.

- (35) Holbrook to N. G. Clark, Okayama, 1-15-1890; Holbrook to
N. G. Clark, Totori, 6-15-1891, ABCFM Papers.

- (36) Susan A. Searle to unknown, Kobe, November 21, 1896,
ABCFM Papers.